

Robert H. Ennis の批判的思考理論における 能力、性向、知識の概念

—— 前期から後期への発展におけるそれらの関連性 ——

林 佳 翰*

The Concepts of Ability, Disposition and Knowledge in Robert H. Ennis' Theory of Critical Thinking

—— Their relationship in the development of his theory from the first to the last terms ——

Chia-Han LIN

本稿の目的は、今日のアメリカにおける批判的思考研究を主導的に推進してきた研究者の一人である Robert H. Ennis (1927～) の理論の特質を、能力、性向、知識の概念の組み合わせに注目した上で、前期 (1962年頃まで)、中期 (60年代後半から80年代前半まで)、後期 (80年代後半から90年代終わりまで) に区分して明らかにすることである。前期 Ennis の特徴は、批判的思考を陳述の査定に限定し、批判的に考える能力を強調したことである。中期 Ennis は、前期の理論の弱点に気づき、合理的思考という用語で望ましい思考のあり方を論じた。合理的思考の中には後期の性向論につながっていく傾向性という概念が登場している。後期 Ennis は、批判的に思考するための能力だけでなく、性向、さらには知識についても論じるようになった。このように、Ennis の批判的思考理論は、もっぱら能力を強調する立場から、性向と知識を加えてより包括的なものに発展していったのである。

1. はじめに

本稿の目的は、今日のアメリカにおける批判的思考研究を主導的に推進してきた研究者の一人である Robert H. Ennis (1927～) の理論の特質を、能力、性向、知識の概念の組み合わせに注目した上で、前期、中期、後期に区分して明らかにすることである。

批判的思考の研究は1980年代以降アメリカを中心として盛んに行われている。

※筑波大学大学院院生

批判的思考の定義は論者ごとにまちまちであるが、その中で、研究者たちによって頻繁に取り上げられてきたのは Ennis の定義である。

さしあたりここでは、Ennis の経歴を紹介する。Ennis は、1958年に Illinois 大学で、B. Othanel Smith らの指導のもと、「批判的思考テストの開発」(*The Development of a Critical Thinking Test*) という研究テーマで博士号を取得した。Ennis の理論が広く知られるようになったのは、彼が1962年に「批判的思考の概念」(A concept of critical thinking) という画期的な論文を発表してからである。彼は Cornell 大学時代 (1958-70) に批判的思考力測定テスト開発チームに参加し、Illinois 大学時代 (1970-94) にも「批判的思考プロジェクト」に参加した。彼は批判的思考の研究に一貫してたずさわってきたのだが、1995年に Illinois 大学を退職し名誉教授になった。Ennis には批判的思考、科学哲学、教育用語の分析などの分野での研究業績がある。Ennis の主著には『教授の論理』(*Logic in Teaching*, 1969), 『批判的思考の評価』(*Evaluating Critical Thinking*, Stephen P. Norrisとの共著, 1989), 『批判的思考』(*Critical Thinking*, 1996) などがある。

Ennis に言及している先行研究は少なくない。アメリカの最近の研究動向でも、Ennis の理論は注目されている^①。例えば Alec Fisher は、批判的思考研究の発展に最も貢献した人物の一人として Ennis の名を挙げ、彼の後期の定義が批判的思考研究において広く承認されていることを報告している^②。また、最新の研究成果を盛り込んだ『Blackwell 入門シリーズ 教育哲学』(*The Blackwell Guide to the Philosophy of Education*, 2003) で、批判的思考の章を執筆している Sharon Bailin と Harvey Siegel は、思考が「批判的」だと言えるためには何らかの規準が必要であり、そのことを強調した例として後期 Ennis の批判的思考の理論を挙げている^③。このように、最新の研究動向でも、Ennis は批判的思考研究の先駆者の一人として位置づけられている。

日本では井上尚美が、国語教育の立場から批判的思考を研究している。井上は、批判的思考の概念について最も緻密なのは Ennis の定義であると評価し^④、最近の研究でも批判的思考を定義するにあたっては、必ず Ennis の定義が参照される^⑤と述べている。しかし井上が注目しているのは前期 Ennis にすぎず、後期の理論には言及していない。また、心理学の立場から批判的思考を研究している道田泰司は、「批判的思考の諸概念」(2001) で、Ennis の批判的思考理論を「初期」と「後期」に区分し、後期 Ennis の定義が批判的思考の研究者たちに最も受け入

れられていると述べている⁶⁾。しかし道田は中期 Ennis の理論には触れていないし、後期 Ennis が知識を重視するようになったことにも注目していない。このように、両者とも Ennis の理論の一部を取り上げているにすぎないのである。アメリカでも日本でも、Ennis の批判的思考理論に関するまとまった研究論文はまだ出されていない。Ennis の理論の全体を解明するという課題は未だ果たされていないのである。

そこで本稿では、本格的には解明されていない Ennis 理論の特質をその発展過程に沿って明らかにする。Ennis 理論の展開をたどるために本稿では、前期、中期、後期という時期区分を設定した。この3期に区分する基準は、批判的思考における能力、性向、知識が各時期で新たに加わったということである。前期から中期への移行は Harvey Siegel の見方に依拠しており、後期に知識が注目されるようになったことは Ennis と McPeck との論争によって分かる。ある人物の理論を3期に分ける場合、初期、中期、後期という分け方が一般的である。しかし本稿では、あえて前期、中期、後期という時期区分を採用した。なぜなら、批判的思考に関する Ennis の論著は前期と後期に集中しており、前期の理論と後期の理論との間には顕著な違いが見られることを考慮して、「初期」よりも「前期」という表現の方が妥当と判断したからである。また、前期と後期に対して、批判的思考に関する論著は中期ではわずかしかないが、中期の思索が後期の理論につながっていることを考慮すれば、中期にも注目すべきである。前期は1960年代前半まで、中期は60年代後半から80年代前半まで、後期は80年代後半から90年代の終わりまでである。前期 Ennis は、批判的に思考するために必要な能力の分析に取り組んだ。中期 Ennis は、前期の理論の弱点に気づき、批判的思考ではなく合理的思考という用語で望ましい思考のあり方を論じた。合理的思考の中には後期の性向論につながっていく傾向性という概念が登場している。後期 Ennis は、批判的に思考するための能力だけでなく、性向、さらには知識についても論じるようになった。このように、Ennis は各時期で、批判的思考の三つの要素（能力、性向、知識）を一つずつ獲得していき、最後に包括的な批判的思考理論を提起している。

2. 前期 Ennis の批判的思考理論——能力中心の立場——

2-1. 「批判的思考の概念」の検討

Ennis は1962年に「批判的思考の概念」という論文を発表した。批判的思考を

テーマとする数編の論文を彼はそれまでも書いていたが、前期 Ennis の立場はこの論文で確立されたとみるのが定説である。この論文で Ennis が試みたのは、批判的に思考するために必要な「能力」(abilities) の分析である。能力が詳しく分析されることによって、批判的思考は単なるスローガンではなく、現実に遂行可能なものになる。この論文は、批判的思考を遂行していくために、具体的に何をすればよいかを提示した点で、重要な意味をもつ⁹⁾。そこで本節では、この論文を主たる手がかりとして、前期 Ennis の理論の特質を明らかにすることとしたい。この論文の特質は、批判的思考を陳述の査定に限定するとともに、査定能力を分析したところにある。

まず、Ennis がこの論文を書いた意図について述べよう。批判的思考は心理学、教育学、哲学などの分野で研究されていると断りながら、しかしその概念には必ずしも十分な注意が払われてこなかった、と Ennis は言う。例えばデューイ (Dewey, J.) は周知の通り、反省的思考 (reflective thinking) を鍵概念として問題解決学習の理論を提唱したが、そこには根本的な問題がある、と Ennis は指摘している。彼の言う根本的な問題とは何か。問題解決学習では、学習者が問題を解決できたと思えば、それで問題は解決されたことになってしまうということである。つまり、問題は論理的基準ではなく、心理的基準によって解決されるにすぎない、と Ennis は批判する¹⁰⁾。したがって、Ennis は批判的思考の論理的基準を明確化することをねらいとして、この論文を書いたと考えられる。

次に、この論文の特質について述べる。Ennis はこの論文で、批判的思考を「陳述を正確に査定すること」(the correct assessing of statements) と定義した。この定義は、批判的思考を陳述の査定に限定している点で、しかも「正確に査定する」ことを強調している点で、他の論者の定義と比べてユニークである。Ennis は、この定義が B. Othanel Smith (1953) の影響を受けていることに言及している。それは具体的には、Smith が「ある陳述が何を意味しているかを見抜き、その陳述を受け入れるかどうかを決めようとする場合、われわれはある種の思考に従事している。適切な言い方が見つからないので、それを仮に批判的思考と呼ぶことにしたい」¹¹⁾と述べていたことを指しているのである。

「陳述を正確に査定する」という定義から言えることは何か。前期 Ennis は批判的思考を陳述の適切性の判断に限定して、どういう行動をとるべきかについての判断はおこなっていないということである。つまり彼は、何を信ずべきかの判

断は下しても、何をなすべきかの判断は下していないのである。行動のレベルで批判的思考が論じられるようになるのは後期になってからである。

さて、陳述を正確に査定することは容易ではなく、間違いをおかす可能性がある、と Ennis は考えた。そして Ennis は間違いをおかすやり方をいろいろと予測して、批判的思考の「12の局面」⁽⁴⁰⁾を提出した。これらの「局面」に注意することで陳述を正確に査定できるというわけである。ここで Ennis は「局面」(aspects) という用語を使っているが、内容的には、陳述を正確に査定するために必要な「能力」を意味している。この「局面」を他の研究者（例えば Siegel）は、スキルと読み替えている。Ennis はそのことに別段異議を唱えてはいないので、「局面」をスキルと解釈しても差し支えないのかもしれない。しかし、Ennis 自身はスキルという用語はほとんど使わず、後期ではもっぱら「能力」(ability) という用語を使い続けている。したがって、本稿では Ennis の主張を述べるとき、「能力」という用語で統一することにしたい⁽⁴¹⁾。

ここで、この12の能力の内容を見てみよう。12の能力のうち、一つ目の「陳述の意味を把握する」を除く11の能力は、すべて「……を判断する」という形式をとっている。例えば、「推論の過程に曖昧さがなくどうかを判断する」、「権威とされる人によって述べられた陳述が受け入れ可能かどうかを判断する」というようにである。つまり、前期の Ennis は、「……を判断する」という形式の能力しか考えていない。その他の思考形式はまだ考慮されていない。(中期以降、Ennis は、その他の思考形式をも加えるべきだと考えるようになった。) このように Ennis は、前期だけでなく、中期でも後期でも一貫して批判的思考の「能力」に注目している。ただし、この論文での局面は、中期では熟達 (proficiencies)、後期では能力として論じられていく。(リストの項目には時期により変動が見られる。)

しかし、この時期の Ennis は、批判的に思考しようとする意欲や態度についてはまったく論じなかった。意欲や態度は、中期では傾向性 (tendency) という概念で、後期では性向 (disposition) という概念で論じられるようになる。

2-2. 前期 Ennis に対する McPeck と Siegel の批判

論文「批判的思考の概念」は、多くの研究者たちによって高く評価されたばかりでなく、批判もされてきた。ここで、この論文への批判に目を向けていこう。

取り上げる批判は、Ennis と同じく批判的思考研究の有力な論者とされている McPeck と Siegel の批判である。なぜこの二人の批判を取り上げるかという点、McPeck の議論は後述する「主題特定性」論と関連し、Siegel の議論は性向論と関連するからである。

McPeck は著書『批判的思考と教育』(*Critical Thinking and Education*, 1981) で、Ennis の主張に対して、(1)能力のリスト作りには意味がない、(2)批判的思考力は一般化しない、という趣旨の批判をおこなった。

Ennis は批判的に思考するための能力を列挙することを試み、12の能力からなるリストを提出した。しかし McPeck は、必要な能力のリストを列挙するという方向での対応には否定的であった。その理由は二つあった。第一に、陳述の査定に際して誤りをおかさないうための能力を網羅しようとしても、誤りのおかし方は無数にあり得るから、リスト作りが完成することはあり得ないということである。第二に、これらの能力を身につければ批判的思考ができる、という前提自体がまちがっているということである。

能力を身につければ批判的思考ができるという前提自体がまちがっているという批判の根拠は、批判的思考力は一般化しないということである。それでは、なぜ批判的思考力は一般化しないのか。批判的に思考するために必要な知識は分野 (field) ごとに異なる。ある分野において批判的に思考できる人が、他の分野でも同じように批判的に思考できるという保証はない。例えば、A氏が批判的な歴史家であるとしよう。しかしそのことは、A氏がどんな分野でも批判的に思考できるということを意味しない。いや、分野が同一であっても、批判的に思考するために必要な知識は主題 (subject) ごとに異なるから、能力のリスト作りに完璧を期し、それらの能力を徹底的に訓練したとしても、それだけでは、いいかえれば当該主題に関する知識をもっていなければ、批判的に思考することはできない、と McPeck は言うのである。

McPeck によれば、批判的に思考するためには、思考の主題についての知識が不可欠である。そのことを McPeck は「思考は必ず X についての思考である。X は『一般的なもの』ではなく、必ず特定の何かである」⁽²⁾と端的に述べている。このように McPeck は、思考主題に関わる知識を重視する。そして、主題が異なれば、それに応じて批判的に思考するために必要な知識も異なる。そういう意味で McPeck は、批判的思考力は一般化しない、と主張したのである。批判的思考は

各分野の知識や個々の活動において遂行される思考なのである⁽¹³⁾。批判的に思考するためには、一般的スキルだけではなく、主題ごとに異なる特定の知識を学ぶ必要があるということになる。

他方、Siegelは著書『理性を教育する』(*Educating Reason*, 1988)で、Ennisが能力ないしスキルを重視するだけで、批判的に思考する傾向性(tendency)については考慮していないことを次のように批判した。「この見解[Ennisの見解——引用者]によれば、ある人が陳述を適切に評価するために必要な熟達(proficiency)、能力(ability)、スキルをもっていれば、その人は批判的思考者なのである。…(中略)…スキルと能力を活用する点については触れられていないのである」⁽¹⁴⁾。

Siegelは、スキルないし能力を一面的に強調する前期Ennisの理論的立場を、批判的思考についての「純粹スキル」⁽¹⁵⁾(pure skills)観念と呼んで批判している。つまり前期Ennisは、スキルを教えることで、批判的思考者を育成できると素朴に考えていたのであり、それらを実際に発動させるもの——中期では「傾向性」、後期では「性向」と呼ばれることになる——の必要性については考えていなかったのである。それがなぜ問題なのかといえば、この論法にしたがうと、スキルを評価するためのテストに合格すれば、それらのスキルを実際に使えなくても、その人は批判的思考者とみなされてしまうからである。こうしてSiegelは傾向性という視点から、前期Ennis理論の弱点を指摘したのである⁽¹⁶⁾。

3. 中期Ennisの批判的思考理論——傾向性の登場——

「批判的思考の概念」以後の20年以上、Ennisは批判的思考をタイトルに掲げる論文を執筆しなかった。その意味で、この時期は長い沈黙期と言うこともできるが、中期のEnnisは後期に向けて着実に思索を重ねていた。中期の論著のなかで、批判的思考に直接関係する業績として位置づけられるのは、「合理的思考の観念」(1980)と「合理的思考と教育実践」(1981)という二論文のみで、しかも後者は、一部、前者での議論をそのまま繰り返したものであり、論文としての独自性は、わずかに合理的思考を、読み・書き・計算と並ぶ、教育の「第4のR」⁽¹⁷⁾と位置づけるべきだと主張した点にとどまる。しかしそれにもかかわらず、これらの論文を注意深く検討すれば、中期Ennisの批判的思考理論が、前期には見られなかった新たな展開を見せていることがわかる。以下、この二論文によりながら中期

Ennis の批判的思考理論の特質を明らかにしていきたい。

中期 Ennis は前期での「陳述を正確に査定すること」という定義の問題性に気づくようになった。批判的思考をこう定義すると、人々の関心はどうしても陳述を査定することに限定されがちである。しかし批判的に思考するということは、陳述を査定するだけにとどまらず、観察したり、推論したり、代案を考えたりすることを含む⁽¹⁸⁾。そこで、これらの活動を含む、より包括的な思考を、中期 Ennis は批判的思考に代えて「合理的思考」(rational thinking)と呼ぶようになった。この合理的思考を前期の批判的思考と比較してみると、二つの特徴が認められる。その一つは能力の内容が拡大したことであり、いま一つは傾向性という新たな要素が付け加わったことである。この二つの特徴により、合理的思考は前期の批判的思考より広がるとともに、質的にも異なるものになっている。

以下、二つの特徴についてさらに詳しくみていこう。

(1)62年論文での能力は、ほとんど「……を判断する」という形式をとっている。ところが80年論文と81年論文では、「推理について十分に組織され定式化された筋道を提案する」、「過程、代案、計画、予測、定義などを考え、述べる」、「権威ありと思われる陳述、演繹的推理、帰納的推理、解釈、価値陳述や定義を評価する」⁽¹⁹⁾などが付け加わった。つまり Ennis は、判断以外の思考形式もあることに留意して、「代案を考える」、「問題を発見する」などを加えたと見られる。

(2)前期 Ennis は、能力だけを問題にして、批判的に思考する心的態度については論じていなかった。しかし中期 Ennis は、そのような心的態度を含む必要があると考え、「全体的状況を考慮しようとする」傾向、「他者の見解を慎重に考慮しようとする」傾向、「証拠や理由が十分なときは、ある立場をとろうとする(または、立場を変えようとする)」傾向など、9つの傾向性を、合理的思考者を特徴づける心的態度として挙げている。

二つの特徴の中でとりわけ重要なのは、批判的思考の要件として、傾向性という新たな要素が付け加えられたことである。なぜなら、批判的思考の能力をもっているだけで、批判的に思考しようとする性向をもっていなければ、批判的に思考することはできない、と中期 Ennis は考えるようになったからである。後期 Ennis は性向を重視するようになるが、その元となる基本的な考えは、すでにこの時期に傾向性という用語で述べられていたのである。彼はそのことを、「熟達だけでは十分ではない。この熟達を働かせる傾向性がなければならない」⁽²⁰⁾と明確

に主張している。Siegelは、この中期 Ennis の立場を、批判的思考についての「スキル+傾向性」⁽²¹⁾の観念と呼んでいる。Siegelはこの観念に基本的に賛意を表しているが、Ennis が傾向性の概念を詳しく論じていないことを次のように批判した。「Ennis の見解はスキルの活用の重要性を認識している点において賞賛されるべきであるが、その一方、批判的思考のスキルを活用する傾向性は、十分に分析されていないし、十分に注目されてもいない」⁽²²⁾と。たしかに中期 Ennis は、傾向性のリストを挙げただけにとどまり、その内容を詳しく説明するまでには至らなかった。性向の内容と批判的思考におけるその位置づけを Ennis が説明するようになるのは後期になってからのことである。

中期 Ennis は、傾向性の内容について十分な説明こそしなかったものの、批判的思考を能力以外の側面から見ようという着想は芽生え始めていたと言えよう。合理的思考者というモデルを設定したことによって、能力に加えて傾向性という概念が登場してきた、と言えらるだろう。

中期 Ennis は「合理的思考」という名前で、望ましい思考のあり方を論じた。しかし、後期になると、彼はふたたび批判的思考という名前を用いるようになる。その理由はよくはわからない。ただし、後期の批判的思考は中期の合理的思考を基本的には踏襲しているとみられることから、合理的思考がふたたび批判的思考という名前で論じられるようになったのだと推測される。いずれにしても、中期の合理的思考論は Ennis 理論の発展過程において重要な位置を占めていた。

4. 後期 Ennis の批判的思考理論——批判的思考の全体像の成立——

Ennis は「批判的思考スキル測定の論理的基礎」(1985)において、批判的思考の定義を一新した。つまり「陳述を正確に査定すること」という前期の定義から、「何を信ずべきか、何をなすべきかの意志決定に焦点を合わせた合理的で反省的な思考」(reasonable reflective thinking that is focused on deciding what to believe or do)⁽²³⁾というふうに、定義を全面的に改めたのである。前期の定義では論じられなかった、行為(「何をなすべきか」)のレベルにまでこの定義は踏み込んでいる。また、この定義には価値判断や意思決定という側面が含まれている。この定義の変更をもって後期の始まりととらえることができる。後期 Ennis は、能力だけでなく、性向(disposition)、主題特定性(subject specificity)をも論じており、批判的思考の概念はいっそう包括的になっていった。

4-1. 性向論

後期 Ennis は、批判的に思考するためには、陳述査定能力をはじめとする能力をもつだけでは不十分であって、能力を駆使する性向をもたなければならないと考えるようになり、中期の傾向性を経て、後期になると性向について論じるようになった。傾向性と性向のちがいについて Ennis は述べていない。ただ、思考主体の心的特性を表す概念としては、たんに行動上の特徴を表現する傾向性よりは、性向の方がふさわしいと言えるであろう。

能力が何かを可能にすることに力点を置く概念であるのに対し、性向は、何かができるというよりは、何かをおこなおうとする持続的な心的構えを表現する概念である。能力がそれぞれの場面において発揮されるものであるのに対して、性向は、批判的思考が必要になった場面で即座に対応できるように、不断に保持されている持続的な心的構えである。

このようなものとしての性向について Ennis が初めて論じたのは「批判的思考スキル測定の論理的基礎」(1985)においてである。この論文では「命題や問題の明確な陳述を捜し求める性向」、「代案を捜し求める性向」、「証拠や根拠が十分なときは、立場をとる(または立場を変える)性向」、「他者の教養の程度、知識水準と感情に敏感になる性向」など、13の性向が提案されている⁽²⁴⁾。能力にしる、性向にしる、それを徹底的に分析していき、包括的なリストを作成しようとする彼の思考パターンは、前期から後期まで一貫している。

「批判的思考：最新式の観念」(1991)では、理想的な批判的思考者は、12の性向と16の能力によって特徴づけられる、と彼は主張している。そして12の性向の中で、Ennis が最も重視しているのは、6つ目の「代案を捜し求める性向」である。

重点的に教えるために、批判的思考の局面を一つだけ選択しなければならないとしたら、私はこれを選択する。なぜなら、私は多くのケースにおいて、この性向が重要であることを見てきたからであり、これは他の多くの性向と重なっているからである⁽²⁵⁾。

Ennis はこの論文で、批判的思考の構造を説明する際に、批判的に思考する性向を基盤に位置づけている。なぜ性向が批判的思考の基礎だと言えるのか。前述のように、性向は持続的な心的構えである。批判的思考が必要になった場面で即

座に対応できるために、人がこの持続的な心的構えを保持しなければならないからである。

後期 Ennis は性向を重視するようになっただけでなく、批判的思考研究の動向に目配りしつつ、性向のリストを修正・改善している。例えば、批判的思考には「ケア」(care) という視点が欠けているという Thayer-Bacon の指摘を承けて、Ennis は「批判的に思考する性向：それらの性質と査定可能性」(1996) で、「すべての人間の尊厳と価値に配慮する」⁽²⁶⁾ という性向を新たに付け加えている。

Ennis は Siegel から批判される前にすでに性向を論じていたのであり、Siegel の批判がきっかけで性向を論じ始めたわけではない。しかし性向論の展開が不十分であるという Siegel の批判が Ennis に、性向について詳論する必要があると考えさせた可能性はある。Siegel が後期 Ennis の性向論をどう見ていたかは興味深い問題であるが、それをうかがい知るための材料を筆者は持ち合わせていない。ただ、『理性を教育する』での論述からだけでも、Siegel が Ennis の性向論に決して満足していないことは容易に見てとれる。Ennis の性向論は結局のところ細分化されたリストの提示に行き着く。それとは対照的に Siegel が重視するのは、根拠によって「適切に動機づけられる」という普遍的な (global) 性向である。それは批判的思考者を特徴づける本質的属性である。いいかえれば批判的思考者とは、細分化された特殊個別的な性向をもっている人ではなく、ある種の人なのである⁽²⁷⁾。このように述べて Siegel は、Ennis とは性向のとらえ方が違うと主張している。

4-2. 主題特定性

後期 Ennis 理論のもう一つの特徴は、McPeck の批判に応えるかたちで、主題特定性について論ずるようになったことである⁽²⁸⁾。主題特定性とは何か。主題特定性とは、批判的思考における知識に関係する概念である。前述のように、McPeck によれば「思考は必ず何かについての思考」⁽²⁹⁾であり、その何か——主題——について批判的に思考するためには、その主題に関わる必要で十分な知識がなくてはならない。主題に特定の知識がなければ、実質的に批判的思考はできない。このように、批判的思考は主題に特定の知識に依存するということが、これが主題に特定の批判的思考（批判的思考の主題特定性）という議論である。そこから McPeck は、批判的思考は主題ごと存在するのであって、それを超えて批判

的思考一般というものが存在するわけではない、と主張した。

さて、批判的に思考するために主題ごとの知識が必要であるという点は、Ennis も承認する。しかし、そこから先がちがってくる。Ennis と McPeck の間には重大な対立が認められる。つまり両者では、批判的思考における知識の重みづけが違う。McPeck は批判的思考の主題特定性あるいは主題制約性を強調する。知識の契機を重視する McPeck は、知識がなければ、批判的に思考することはできないと主張する。それに対して Ennis は、批判的思考が主題特定性をもつことを認めつつも、むしろその共通性の方に注目する。Ennis の関心は、主題フリー（あるいは知識フリー）な批判的思考の形式（批判的思考の一般的形式）の方であった。

批判的思考一般があり得るかかどうかという対立は、批判的思考のカリキュラムに関する論争につながっていく。「批判的思考」という独自の教科ないしコース（以下、独自教科と略記）において、批判的思考を教えるのがよいのか、それとも、例えば国語科、社会科など既存の各教科で、批判的思考を教えるのがよいのか、という論争である。McPeck は、批判的に思考するために必要なのは主題に特定の知識であり、批判的思考一般というものはあり得ないという立場から、批判的思考は既存の各教科で教えるしかないし、またそれでよいのだと主張した。Ennis は主題特定性という考え方を基本的に認めたものの、McPeck と違って、批判的思考一般というものがあると考え、批判的思考は、独自教科と既存の教科の両方で教えられるし、教えるべきだと主張した。

後期に至って初めて Ennis は、能力、性向、知識の三つをとともに論じた。ここで、この三つの関連性を整理してみよう。Ennis は、理想的な批判的思考者をイメージして、批判的思考者が身につけるべき能力と性向を提出した。しかし実際に思考するときには、思考対象についての知識が必要になってくる。Ennis は McPeck の論点を取り込んで、知識も批判的思考にとって必要なものであると考えている。しかし、知識は能力や性向とは性質が違う。能力と性向は批判的思考の要素であり⁹⁰、批判的思考者の特性である。それに対して知識は、批判的に思考する条件である。しかも、思考するためにどんな知識が必要なのかを判断するのは能力である。以上をまとめると、批判的思考とは、能力と性向を身につけた思考主体が、問題を分析し、必要な知識を捜し求め、意思決定をくだす思考である。

5. おわりに

本稿では、Ennis の理論の前期から後期に至る展開過程を、批判的思考の構成要素に焦点をあてて検討してきた。前期 Ennis は批判的思考を「陳述を正確に査定すること」と定義して、そのための能力をもっていれば批判的思考は可能と考えていた。中期 Ennis はこの定義の狭さを反省して、批判的思考に代えて合理的思考を論じた。合理的思考には、陳述の査定だけでなく、推論、代案の想像などの能力が含まれるようになった。また、能力だけでなく、合理的に思考する傾向性も含まれた。これらの要素が後期の理論を構築していく基盤になった。後期 Ennis は、ふたたび批判的思考という用語を使うようになった。しかし言葉は前期と同じでも、その内容は前期とは相当に異なるものであり、ほとんど全面的に一新されたと言ってもよいものである。批判的思考の構成要素には能力だけでなく、それを使いこなす性向と知識論的要素（主題特定性）が新たに付け加えられることになったからである。後期 Ennis は、批判的思考を能力、性向、知識という三つの観点から論じるようになったのであり、批判的思考の概念はより包括的で豊かなものになったのである。Ennis 理論のこのような展開過程は、彼の理論の内在的發展であるとともに、他の論者たちとの活発な相互批判を踏まえており、その意味でアメリカにおける批判的思考をめぐる議論の発展を反映しているのである。

註

- (1) 例えば、Bruce D. Smith は、Ennis の62年論文における能力のリストを、「最も思慮深い分析」と評価している (Bruce D. Smith, *Instruction for critical thinking skills*, *The Social Studies*, 74, 1983, p. 211.)。C. Blaine Carpenter と James C. Doig は、批判的思考力を測定するためには、批判的思考の概念を明確化する必要があると述べている。彼らは、その例として、Ennis の批判的思考にはさまざまなスキルが含まれているので、Ennis は批判的思考を広く定義しているから、その定義がよいとして推奨している (C. Boaine Carpenter, James C. Doig, *Assessing critical thinking across the curriculum*, *New Directions for Teaching and Learning*, 34, 1988, pp. 33-34.)。
- (2) Alec Fisher, *Critical Thinking*, Cambridge University Press, 2001, p. 4.
- (3) Sharon Bailin, Harvey Siegel, *Critical thinking*, *The Blackwell Guide to the Philosophy of Education*, edited by Nigel Blake, Paul Smeyers, Richard Smith, and Paul Standish, Blackwell Publishers Ltd, 2003, p. 181. 参照。Bailin と Siegel が執筆した「批判的思考」という章の構成は、研究者ごとの理論を追うのではなく、最新の批判的思考の研究動向

を紹介したのである。その中で、Ennis は批判的思考の先駆者として名前があがっている。

- (4) 井上尚美『言語論理教育入門』明治図書、1989年、47頁。
- (5) 井上尚美『思考力育成への方略——メタ認知・自己学習・言語論理——』明治図書、1998年、154頁参照。
- (6) 道田泰司、「批判的思考の諸概念」『琉球大学教育学部紀要』59、2001年、121頁、123頁。
- (7) この論文は、後続の研究者たちによって何度も取り上げられてきた。例えば、John E. McPeck はこの論文を「画期的な論文」と高く評価している (John E. McPeck, *Critical Thinking and Education*, Martin Robertson · Oxford, 1981, p. 2.)。また H. Siegel は、批判的思考について研究しようとする者は、この論文から着手しなければならないと述べている (H. Siegel, *Educating Reason*, Routledge New York and London, 1988, p. 5.)。さらに、フェミニズムの立場から批判的思考を論じている Barbara J. Thayer-Bacon は、Ennis のこの論文が当時沈滞していた批判的思考に関する関心をふたたび呼び起こすことになった、と述べている (Barbara J. Thayer-Bacon, *Caring and its relationship to critical thinking*, *Educational Theory*, 1993, p. 326.)。このように、この論文は、くりかえし論評されてきたのであり、批判的思考の研究史において重要な位置を占めていると言うことができる。
- (8) Robert H. Ennis, A concept of critical thinking, *Harvard Educational Review*, 32-1, 1962, pp. 81-82.
- (9) *ibid.*, p. 83.
- (10) Ennis の提出した12の局面のリストは以下の通りである。「1. 陳述の意味を把握する, 2. 推論の過程に曖昧さがないかどうかを判断する, 3. 陳述同士が矛盾していないかどうかを判断する, 4. 結論が必然的かどうかを判断する, 5. 陳述が十分に明確かどうかを判断する, 6. 陳述が一定の原理の適用かどうかを判断する, 7. 観察内容の陳述 (observation statement) が信頼できるかどうかを判断する, 8. 帰納的に引き出された結論が正当化されるかどうかを判断する, 9. 問題が特定されているかどうかを判断する, 10. ある事が仮定であるかどうかを判断する, 11. 定義が適切かどうかを判断する, 12. 権威とされる人 (an alleged authority) によって述べられた陳述が受け入れ可能かどうかを判断する」。
- (11) 能力とスキルという二つの概念を区別することは難しい。註3の論文で、Bailin と Siegel は「スキル/能力」と表記しているが、それは、能力とスキルが置き換え可能な概念であることを意味している。
- (12) McPeck, *op. cit.*, p. 4.
- (13) *ibid.*, p. 56. cf.
- (14) Siegel, *Educating Reason*, Routledge New York and London, 1988, p. 6.
- (15) *ibid.*, p. 6. cf.
- (16) Siegel は、Ennis の性向論に注目し、批判しつつけている。中期 Ennis についての

Siegel の批判は、本論文の 8 頁で述べている。後期 Ennis についての Siegel の批判は、本論文の10頁で述べている。Siegel は後期 Ennis の定義で現れる「行為レベル」について触れていない。

- (17) Ennis, Rational thinking and educational practice, *National Society of the Study of Education*, 1981, p. 165.
- (18) Ennis, A conception of rational thinking, *Philosophy of Education 1979*, Bloomington, IL: Philosophy of Education Society, 1980. p. 3.
- (19) *ibid.*, p. 6. cf.
- (20) Ennis, Rational thinking and educational practice, *National Society of the Study of Education*, 1981, p. 182.
- (21) Siegel, *op. cit.*, p. 6.
- (22) *ibid.*, p. 7.
- (23) Ennis, A logical basis for measuring critical thinking skills, *Educational Leadership*, 43(2), 1985, p. 45.
- (24) *ibid.*, p. 46.
- (25) Ennis, Critical thinking: A streamlined conception, *Teaching Philosophy*, 14(1), 1991, p. 13.
- (26) Ennis, Critical thinking dispositions: Their nature and assessability, *Informal Logic*, 18(2&3), 1996, p. 171.
- (27) Siegel, *op. cit.*, p. 8.
- (28) Ennis は明言してはいないけれども、論文 Critical thinking and subject specificity: Clarification and needed research, *Educational Researcher*, 18-3, 1989. の中で、McPeck の『批判的思考と教育』における所説を引用しているところから見て、McPeck の批判をかなり意識していることが分かる。
- (29) McPeck, *op. cit.*, p. 3.
- (30) 能力と性向の二つは、概念としては区別できるが、実体的には区別できないであろう。両者はむしろ同一物の両面ととらえるべきである。Ennis が重視する「代案を捜し求める」を例としてこれを説明してみよう。代案を捜し求めることができるという面に注目すれば、それは能力に見えてくる。しかし代案を捜し求めようとする持続的な心的構えという面に注目すれば、同じものが性向に見えてくる。どういう面に注目するかによって、違うものが見えてくるのである。要するに、能力と性向は実体概念ではなく、説明概念である。この実体視は、Ennis だけでなく、他の論者たちについても言える。